

# 留学報告書

2022年4月

立石 泰佳 (たていし やすか)

昨年9月に渡英し、University College London (UCL) での PhD 課程が始まりました。1年間入学を遅らせたこともあり、やっと学生生活を始めることができたことを嬉しく思っています。あまりにも目まぐるしい毎日で執筆が大幅に遅れてしまいましたが、ロンドンでの生活について報告させていただきます。

\*\*\*\*\*

## UCL について

社会科学の PhD 課程では、アメリカとイギリス／ヨーロッパでプログラムの構成、入学要件、論文指導などで大きく異なるという印象がありますが<sup>1</sup>、経済学に限って言えばイギリス／ヨーロッパにもアメリカ式の教育を採用している大学が複数あります。UCL もその 1 つで、1 年目にコア科目と呼ばれる経済学の基礎を、2 年目には自分の専門分野により特化したフィールド科目を履修し、その後は TA・RA として働きながら論文を書き、合計 6 年程度で卒業する、というプログラムです。特にここ数年はフィールド科目の選択肢が増えたり、アメリカと同様のファンディングが設けられるなど、少しずつ改革が加えられている印象があります。また、私が専攻している開発経済学では LSE と共同でセミナーが開催されており、ロンドンの地の利を活かしたネットワークが存在することも特徴的です。

## 大学院の授業

経済学 PhD の 1 年目は非常に忙しいので覚悟するように、とは多くの先輩方から言われてきましたが、実際に始めてみて授業や課題には本当に圧倒されました。大学受験の時よりも机に向かっている時間が長いのではないかとすら思います。ミクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学・数学の 4 つの授業が必修で、それぞれ週 2 時間の講義 (1 学期目のミクロのみ 4 時間) と 2-3 時間の TA セッションがあります。数学は夏に math camp として集中講義が行われる大学がほとんどですが、UCL では通年で授業を取る形になります。授業は対面・オンラインのハイブリッド開催 (ほとんどの学生は対面での出席) で、イギリス政府が規制を撤廃していったこともあり、新型コロナウイルスの蔓延による不都合を感じない生活を送っています。

---

<sup>1</sup>一般的に、ヨーロッパ／イギリスの社会科学系の博士課程では入学前から研究計画があり、指導教官から受け入れの内諾がある状態で受験し、3-4 年間で論文を書くことがメインになる (必修授業などは非常に少ない) のに対して、アメリカでは入学時に研究の具体的な計画は必要なく、1-2 年目に授業を受けて研究の基礎を身につけてから論文を書かせるフェーズに移行するため、全体で 5-6 年かかるという違いがあると思います。

必修授業の中でも 1 学期目はミクロ経済学が非常に厳しく、かなり労力をかけました。というのも、他の授業の 2 倍の授業時間数がある上に毎週課題を提出する必要があり、難易度も高かったからです。平日はほぼ毎日友人たちとミクロの問題を議論しながら解き、週末に 10 ページ弱に及ぶ解答を LaTeX で清書するという日々で、他の授業の勉強をする時間が取れないほどの負担でした。ただ、先生の授業の説明の仕方が分かりやすく、課題を解くことで習った定理がどのように経済学の問題に応用されるのかの気付きが与えられるようになっていて、終わってみれば一番楽しんだ科目でした。学期の最後にはミクロ理論の論文を 1 本読んでコメントを書くという課題が与えられ、私の研究関心である紛争に関してゲーム理論からアプローチする研究について学ぶことができたのも面白かったです。

2 学期目は比較的余裕があったのですが、やはり授業の難易度が高く、理解に苦労しました。特にミクロ経済と計量経済学では担当教員の working paper を学ぶ回が多々あり、あまり標準的ではない内容に困惑しました。専門ではないのですが案外マクロ経済学の授業を一番楽しんだかもしれません。UCL ではマクロの 2 学期目の試験が Matlab で解く問題が含まれているため、numerical method を学ぶことができたのが面白かったです。

授業期間後の 1 月と 5 月にそれぞれ試験があり、平均点が基準を超えれば 2 年目への進級要件を満たすことができます。今年は海外から授業を受けている人もいるため、問題が発表されてから 24 時間後に解答を提出する形のオンライン試験です。1 月に受けた試験は非常にプレッシャーがかかり、特に計量経済学の問題には 23 時間起きたまま取り組んだので疲弊したのですが、成績もよかったのでひとまず安心していきます。また、試験勉強をするうちに 1 つの授業で学んだことが別の授業で学んだ定理に結び付いたり、知識が有機的に広がっていく感覚を味わえ、今までになかった観点から経済学の面白さを再発見する契機となりました。

## 研究について

UCL では 1 年目から論文を書く必要があるという特色があります。11 月頃に指導教官が割り振られ、大まかなトピックと、今後どのようなスケジュールで研究を進めていくか、などについて話しました。授業に追われる中でほとんど研究に時間を割くことができなかったのですが、3 月にプロポーザルを提出必要があったことから、ようやく大まかな計画を練ることができました。紛争に関連した forced displacement についてのペーパーを書く予定で、データも入手したのであとは指導教官に相談しつつ分析を進めていくという段階です。上手くいけば面白い implication がありそうなアイデアなので、今から研究を進めるのが楽しみです。

## 生活面

ロンドンに住むのは 2 回目ということもあり、土地勘があることも手伝って過ごしやすさを感じています。正直なところ毎日大学と家の往復ばかりなので、ほとんど観光はできていません。今はロンドン北部で私を含め 4 人でフラットシェアをしています。1 人は UCL の経済学 PhD3 年目でマクロ経済を専攻していて、課題を教えてもらったり、生活面のアドバイスをしてもらったりして非常に助かっています。また、大学には自転車通学をしていて、冬の早朝に低い太陽に

照らされながら学校に向かい、帰り道に街灯に照らされる木の葉を見ながら自転車を走らせるのがとても気持ち良いです。一度職務経験を挟んだがゆえに自分のためにすべての時間を使える状況が嬉しく、気の合うクラスメイト達と毎日課題について議論する日々が楽しくて、忙しいながらも充実した日々を過ごしています。

ただ、今年に入ってから不運な出来事が重なり少し参っています。2月にはパブで友人たちと飲んでいたら鞆を盗まれ、パソコン、iPad、財布などを失うという痛手を負いました。盗まれてからすぐに気付いたので iPad の位置情報を追ったのですが、警察に伝えたところ自分でその場所まで行くように指示され治安の悪い場所で夜遅くに立ちすくむ、という経験をしました。

(犯人に対峙したくはないので付き添って欲しかったと改めて電話すると、そんな馬鹿げた指示をしたのは誰だと別の警察官が困惑していました)盗まれたものは返ってきませんでしたが幸い友人が帰宅するまで付き添ってくれたので身の危険はなく、軽くパニックになった私の横でクレジットカードを止めるための手順を調べてくれたり、警察に代わりに話してくれたりしたので被害は少なく済みました。また、その後もフラットメイトがパソコンを貸してくれたり、気晴らしになるようにと映画や飲みに誘ってくれる人がいたり、友人のありがたさを感じています。

そして実は4月に1週間の予定で日本に帰国したのですが、入国時の空港検疫で陽性になってしまい現在は隔離ホテルに滞在しています。イギリスの状況を鑑みるにいつ感染してもおかしくなかったとはいえ、一番嫌なタイミングで罹ってしまいました。72時間前のPCRも、出国前日・当日に自主的に受けた簡易検査も陰性だったのでまさか感染しているとは思わなかったのですが、家族を含め他の人に移す前に陽性であることが分かったのが不幸中の幸いです。帰国の目的を果たせなかったのは残念ですが、隔離中は毎日のように友人たちが電話に付き合ってくれて、ホテルの食事も美味しいので案外快適に過ごしています。とはいえ、これ以上の災難に見舞われないよう願うばかりです。

これからロンドンに戻り、5月の試験に向けて勉強し、夏には論文を執筆します。ひとまず学期は乗り切りましたが、今後も気を引き締めて研究に励んでいきたいと思います。